

NATO 宗教

アルフレッド・ゼイヤス（「コロンビア大学や国際開発研究大学院の客員教授、国連人権理事会特別報告者」著、脇浜義明訳 原典：Counter Punch, 2022年1月24日



Image by [Artur Voznenko](#).

米国、NATO、ウクライナとロシアの対立は新しいものではない。2014年に米と欧州諸国がウクライナ内政に介入して、民主主義的選挙で選出された大統領ヴィクトル・ヤヌコーヴィチが西側の思惑通りの政治をしないので、彼を倒すクーデターに直接・間接に関与して以来ずっと続いている¹。あの時の暴動を西側メディアは民主主義で飾り立てた「カラー革命」と賛美した。

現在の2021～22年危機も、ソ連崩壊後 NATO が進めている東方拡大政策から生じた論理的帰結である。これは多くの国際法や国際関係の研究者が前々から指摘していたことである — 例えば、リチャード・フォーク、ジョン・ミアシャイマー、スティーヴン・キンザー、フランシス・ホイル。NATO は主権国家の意向や人民の自主決定権を無視して、米国が米国式社会—経済—制度—価値観モデルを他国に輸出して教えるという「使命」を、米国と共に執行しているのである。

米と NATO が発する談話は不正確であるばかりか、多くの場合は意図的な嘘であったことは、歴史的に何度も証明されてきた。それにもかかわらず、西側世界の人々の大多数はそれを無批判に信じている。『ニューヨーク・タイムズ』、『ワシントン・ポスト』、『ザ・タイ

ムズ』、『ル・モンド』、『エル・パイス』、『ノイエ・チュルヒャー・ツァイトウング』、『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトウング』などのいわゆる高級新聞はみんなアメリカン・スタンダード又はワシントン・コンセンサスを事実上オウム返しに伝える反響箱のようなもので、米の外交政策や地政学的プロパガンダ攻勢を支えている。私は、NATO が勝利した戦争は情報戦争だけだと、自信を持って宣言する。政府に従順で政府と共謀する企業メディアのおかげで、米欧の民衆の多くは政府の流す有害な談話を真実だと思い込むのだ。「アラブの春」や「ユーロマイダン」（「ヨーロッパ広場」の意味）はよく聞かされるのに、ドネツク州やルハンスク州のロシア系人民の民族自決権や「クリミアの春」と呼ぶこともできるクリミアの自立という表現はまったく聞かされない。

米政府がこれまで外国への侵攻を「自国防衛」と見せるために大嘘をついてきたことは歴史的に明らかになっているのに、何故今回の米欧のウクライナに関する嘘が罷り通るのだろうか。「トンキン湾事件」²やイラクに大量破壊兵器があるという嘘の発表に、民衆は騙されてきた。米のCIA や英のMI5 が中東などで何度も「偽旗作戦」を策動した証拠はたくさんある。西側世界の教育ある大勢の人々が過去の政府の嘘から学んで、ちょっと政府から距離をとって、疑問を持とうとしないのは何故なのだろうか？ 私はこの疑問に対する答えとして、NATO 現象を理解する方法として、NATO を一つの世俗的宗教と見ることにした。宗教だと見れば、NATO の信じ難い大嘘を信者が鵜呑みに信じ込むのが分かる。

NATO 教は山上の垂訓のような万人の至福を説く宗教ではない — 「持てる者は幸せである」(Beati Possidetis) と説く西側選良のための宗教である。その教義は「私のものは私のもの、あなたのものは交渉によって決めよう」という論理である。私が征服したものは公正な形で手に入れたものだとして正当化する論理である。NATO を宗教とみると、ヨーロッパ、中東、ウクライナ、ユーゴスラビア、リビア、シリア、イラクの政治的展開がよく理解できる。

NATO 信条は幾分カルヴァン主義的である — つまり、「選ばれし者」による「選ばれし者」のための宗教である。「選ばれし者」とは西洋人であり、西洋人は「善い人たち」で神の救いに値する人たちと定義される。これが鵜呑みにされて信じられている。すべての宗教と同じように NATO 教も独自の教義と語彙を持っている。NATO 語彙では「カラー革命」はクーデターのことで、民主主義は資本主義と一体で、人道主義的介入は論理的必然として「政権交替」を伴い、法の支配とは NATO の支配で、「悪魔ナンバーワン」はプーチン、「悪魔ナンバーツー」は習近平である。

人々は NATO 教を信じるのか？ きっと信じているのだろう。古代ローマ時代のカルタゴの神学者テルトゥリアヌスは「不合理ゆえにわれは信ずる」(credo quia absurdum) と書いた。NATO の不合理はありふれたバカバカしい不合理やホラを超える悪質なものだ。NATO 教を存続させるために米国民、世界人民、国連に嘘を提供し続けなければならないのだ。

嘘の例はいくらでもある。2003年のイラクが大量破壊兵器を所有しているという嘘

は他愛のない嘘 (pia fraud) どころではなかった。政治家、有識者、メディアが寄ってたかって入念に練り上げた大嘘であった。この嘘のために何百万人ものイラク人が死に、国家が潰れたのだ。当時この犯罪に対して、多くの米国人が「我々の名を使った犯罪行為をやめろ」と叫んだが、耳を傾けなかった米国人の数の方が多かった。当時の国連事務総長コフィー・アナンはイラク侵攻を国連憲章違反だと繰り返し言った。それに対してジャーナリストたちが「根拠を示せ」と事務総長に詰め寄った。総長はイラク侵攻は国際法に違反する「不法戦争」だと答えた。実際、それは単なる不法戦争にとどまらず、ニュルンベルク裁判で確認された戦争犯罪に関する法原則であるニュルンベルク原則に反する重大な戦争犯罪であった。紛れもない国際法違反であった。米国と米国に連なる「有志連合」 — 国連憲章と市民的及び政治的権利に関する国際規約の遵守を誓っている国々が故意に国際法の支配を破ったのである。

普通は、生死に関わる問題で嘘をつかれた場合、健全な懐疑心、つまり一定の用心深さが生じるものである。理性のある人間は「よく似たプロパガンダで以前騙されたことがある」と反応するものだ。しかし、NATO 教信者はそう反応しない。NATO の談話を鵜呑みにして信じ込むのだ。イエンス・ストルテンベルク NATO 事務総長の言葉を疑うことはない。国事に関する嘘は「威厳ある立派な」行いで、それに疑問を抱くのは「非愛国的」である — 気高い目的のためなら不正手段でもかまわないとするマキャベリズム原理 — という暗黙の了解があるようである。

宗教にとって困るのは背教者の出現である。指導者が信者を騙したことが明らかになると、背教者が生まれることがある。指導者への信頼を失った信者は他に信ずべきもの — 例えば歴史、遺産、伝承など — を探す。私は「間違っているけどわが祖国」という盲目的国家忠誠心を否定する。愛国者の一人だが、NATO 教への背教者である。私は米国が正しいことをすることを望んでいる。間違った方向へ進んだ場合は、米憲法、独立宣言、ゲティスバーグ演説、その他私がまだ信じている遺産へ米国が回帰することを望んでいる。

NATO は、過去の膨張主義的イデオロギーと同じように、弱いものいじめの乱暴者や好戦家にぴったりの宗教として出現した。多分心の中では、古代ローマ人はローマ軍団を自慢に思い、フランスの精鋭部隊兵士はナポレオンの栄光のために死ぬことを誇りに思い、多くの米兵はベトナム、ラオス、カンボジアへの空爆を喝采したのであろう。

私個人は NATO を村の乱暴者と同じと見ているが、自分の影を飛び越える度胸がある米国人は多くない。国家指導者を否定するような向こう見ずなことをやる度胸はない。民主主義と人権擁護という何度も繰り返される怪しげな談話を信じる方が楽だからである。私は、そんな談話よりアフガニスタン、イラク、シリア、ユーゴスラビアで NATO のドローンや劣化ウラン弾で犠牲になった人々の NATO 観を聴きたいし、それを聴くことを人々に薦めたい。

多くの宗教は自分だけが真理を表現し、それを破壊しようとする悪魔を想定する唯我論的で自己美化的である。NATO は古典的な唯我論的、自己中心的、利己的な宗教で、自らを

善の力という絶対的前提に立っている。他者を自分と同じように長所もあれば欠陥もある存在で、その言い分には真理も含まれているという見方ができない。

NATO は過去二世紀間にわたって米国が実践してきた「例外主義的」ドグマに立脚する。米国と NATO は国際法、いや自然法則からすらも超越した存在である。「例外主義」というのは古代ローマが掲げたスローガン「ジュピター（最高神）が行うことは許されるが牛（一般の人間）には許されない」（*quod licet Jovi, non licet bovi*）と内容的に同じである。我々が「牛」である。

それに、我々西洋人は古代から「いかさまでも勝てばよい」という競争文化（*culture of cheating*）あるいは略奪文化に染まっている。他国人が我々の賢いいかさまに敗れたのに、その敗北を認めない態度に我々は驚き、あきれられる。このいかさまでも勝つという文化は我々の第二の性となっているので、他者を騙して破壊しても、それを犯罪と意識しないことが多い。これは文明化によってもまだ除去されていない捕食者習性の一つである。

同時に、NATO はネオリベラリズムと同類の、21世紀帝国主義の表現と言えるのではないだろうか。NATO は地政学的敵対者を挑発して脅かしているばかりでなく、仲間の弱小国家をも略奪・搾取している — NATO 全体の安全保障上止む無くではなく、強国の軍産金融複合体の利益のためにである。ヨーロッパの安全保障と言うなら、それは交渉と妥協と合意で保てるはずだ。欧州大陸で暮らすすべての人々の考え方を理解し尊重することで相互安全が保てることは誰もが理解しているはずなのに、実際にはまったく理解されていない。安全保障が軍拡競争や武力威嚇と同意義であったことは歴史上一度もなかった。

過去73年間にわたって NATO が行った狼藉行為は犯罪ではなく遺憾な誤りであった、というのが主流派の談話である。歴史家として、あるいは法学者としても、真理のための闘いに敗北するかもしれないと思うことがある。30年後、50年後、80年後の世界では NATO のデマ談話が認められた歴史的事実となっているかもしれない — 歴史書に記載され、学校で教えられる史実として確立してしまっているかもしれない。法学者と同じように歴史家もお雇い文筆家であることが多い。だから、時が経てば歴史の客観性が増加するという幻想は捨てた方がよい。現段階ではまだ目撃者や経験者や彼らの証言で研究する学者がデマの偽りを指摘できるが、年月が経つとそれらの人々が亡くなり、嘘談話を反証できなくなると、嘘が歴史的事実として認められてしまうことになる。公文書が機密扱いから外されて政府談話の嘘が暴かれることに期待するのも捨てた方がよい。政府の嘘が明らかになっても嘘が覆ることがなく、そのまま公式に続いていることが多いことは、これまでの経験で明らかである。

残念ながら、米国人や欧州人の多くは NATO 談話を信じ続けている。自分たち西洋人は「善い者」で、「あそこの地」の危機が自分たちの安全を脅かすので NATO が必要と考える方が、気持ちよく気楽であるからだ。ジュリアス・シーザーが『内乱記』で「我々は信じ難いことを信じる」（*quae volumus, ea credimus libenter*）と書いたが、人々は本当は騙されることを望んでいるのだろうか。

客観的に見れば、NATO の東方拡大と絶え間ないロシア挑発こそが危険な地政学的誤りであったし、今回の危機もその誤りの継続である。ナチとの闘いで多大の犠牲を払ったロシア人民に対する尊敬の念への背信行為であり、人類の圧倒的多数の人々が抱いている平和への希望への背信行為である。1989/91年に世界平和に向かう機会と責任が生まれた³。しかし、傲慢と権力欲がその希望を砕いた。産軍金融複合体が巨万の富を稼ぐために絶え間ない戦争か戦争脅威を必要としたのだ。1989年は、国連憲章の実現、国際法尊重、軍事優先経済から安全と福祉の経済への転換、無用な軍事予算を削減して貧困や伝染病対策に回し、医療の開発・研究予算の増額、病院や教育インフラの拡充、気候変動問題への取り組みなど、そういう人々の幸せに貢献する時代に向かうチャンスだったのに。

そのチャンスを潰したのは誰か？ ジョージ H.W. ブッシュとマーガレット・サッチャーを筆頭に、その後継者、ネオコン補佐官たち、「例外主義」推進者、彼らを支えたシンクタンクや学者たちであった。

どのようにしてチャンスを潰したか？ 偽情報とプロパガンダによって。ソ連崩壊を西側の勝利と喜んだフクヤマの「歴史の終わり」と「勝者がすべてを得る」という思想を褒めたたえた企業メディアの共謀によってである。一極的世界という怪獣となった NATO はその覇権を世界に押し付けるために多くの残虐行為をおこなった。「民主主義」と「ヨーロッパ価値観」の名のもとに、人道に反する犯罪を数多く行った。

企業メディアは律義にロシアと中国を不倶戴天の敵と描き続けた。ロシアと中国と理性的に話し合おうという提案は「宥和」とか「妥協」と非難された。しかし、「宥和する」相手はむしろ我々自身ではないか。頭を冷やし、一歩下がって客観的に物事を見つめ直すべきなのは我々の側ではないのか。軍事的・情報戦的攻勢で中国やロシアを追い込んできたのは我々ではないのか。

国際的法の支配 — ブリンケン米務長官の言葉を借りれば「ルールに基づく国際秩序」を無視しがちな国があるならば、それは米国だ。米国が批准していない国際条約をあげると、条約法に関するウィーン条約、国際司法裁判所に関するローマ規程、海洋法に関する国際連合条約、領空開放条約、外交関係に関するウィーン条約の選択議定書、領事関係に関するウィーン条約の選択議定書、国連子どもの権利条約、移住労働者権利条約、経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約等。

結局、21世紀を正しくとらえたのはハンティントンでもフクヤマでもなく、ジョージ・オーウェルだったと思える。

訳注

¹ ヤヌコーヴィチがEUとの連合協定を見送ったのに腹を立てた米が、汚職が多いヤヌコーヴィチ政治への民衆の怒りを利用して起こさせた暴動で、ユーロマイダン革命と呼ばれ

ている。欧米メディアはロシアの関与で起きた危機と報道したが、オバマは米の直接関与を認めた。EU 関係者の中にも、EU がウクライナに東西選択を強要したことがウクライナ危機を生んだと発言している人も少なくない。

2 北ベトナム軍が米駆逐艦を魚雷攻撃したと言って米は北爆を開始したが、実は米軍が仕組んだことが後に発覚した。

3 NATO とワルシャワ条約機構の間で通常戦力制限条約が結ばれ、NATO 首脳会議で冷戦構造を改めるローマ宣言が採択された。